聖　書：創世記 18：1〜15
説教題：いや、あなたは笑った
日　時：2023 年 9 月 3 日（朝拝）

創世記第 18 章は「主は、マムレの樫の木のところで、アブラハムに現れた」という言葉で始まります。そう言われてここに出て来るのは 2 節の三人の人です。果たしてこの三人と主はどういう関係にあるのだろうと私たちはまず思います。ある人はこの三人は三位一体の神を表している。それぞれ父、子、聖霊を指すと言いますが、そこまでのことをここから読み取るのは困難と思います。この後を読むと 10 節で三人の中の一人が話し始めますが、おそらくその人を指して 13 節で「主」と言われています。そして次回見る 16 節以降で三人は立ち上がり、アブラハムは見送りに一緒に行きますが、22 節に「その人たちは、そこからソドムの方へ進んで行った」とある一方、アブラハムはまだ主の前に立っていたとも記されます。そしてその主との会話がしばらく記された後、この章最後の 33 節で「主は、アブラハムと語り終えると、去って行かれた」とあります。そして 19 章 1 節に、ソドムへと進んだ二人は御使いであると言われています。以上のことからすると、三人の内の二人は御使いで一人は主ご自身であった。主が人の形を取ってここに来られていたということなのかもしれません。あるいは三人とも御使いで、その内の一人が特に主を代表し、主の言葉を取りついでいたと考えることも可能かと思います。いずれにせよ、主がこうしてアブラハムのところに来られ、彼に現れたということがまず語られています。

では何のために主は来られたのでしょうか。この後を読んで分かることは主は彼に二つのことを示されるということです。一つは彼の妻サラにいよいよ来年約束の子イサクを出産すると伝えることです。特にそのことに向けて彼女の信仰を整えるためです。もう一つはソドムとゴモラのさばきについて彼に話し、ともに考えることです。このように主はアブラハムにご自身の御心を示し、分かち合うために来られました。アブラハムは「神の友」と呼ばれたとヤコブの手紙 2 章 23 節に記されていますが、神はアブラハムを友としてその御心を分かち合い、またご自身を分かち合うために彼のところに来られたのです。

しかしアブラハムは最初から今回来られた方が主だと分かっていたわけではありませんでした。ヘブル人への手紙 13 章 2 節に「旅人をもてなすことを忘れてはいけ

ません。そうすることで、ある人たちは、知らずに御使いたちをもてなしました。」とありますが、これはまさに今日の箇所のアブラハムに当てはまることでしょう。この時、彼は日の暑い頃、天幕の入り口に座っていました。これは日中の一番温度の高い時のことです。昼間は暑くてとても仕事などできないために皆が一旦活動を停止し、夕方からの活動再開に備えてゆっくり体を休める時間でした。そんな時にアブラハムが目を上げて見ると三人の人が彼に向かって立っていました。その時、アブラハムはどうしたでしょうか。しようと思えば彼は目をつぶって見ないふりをすることもできました。今は動きたくない。これは貴重な休みの時間であると思って狸寝入りをすることもできました。ところが彼はそうしませんでした。目の前にはこの暑い中、立っている人たちがいます。助けを必要としている人たちがいます。アブラハムはその姿を見るなり、彼らを迎えようと天幕の入り口から走って行ったのです。この見知らぬ三人のもてなしのために午後の貴重な休みの時間をささげたのです。

　このアブラハムのもてなしにはいくつかの特徴が見られます。一つは素早いということです。今見た 2 節に「走って行き」とありましたが、6 節でもアブラハムはサラのところに急いで行きます。さらに 7 節でも牛のところに走って行きます。三人の旅人が早くに癒されるように、そのために進んで動いている彼の姿が印象的です。またそのもてなしは上等のものでした。おそらくアブラハムが地にひれ伏したり、3 節で「主よ」と呼びかけていることからすると三人の旅人は威厳のある人たち、特別な人たちとアブラハムには見えたのでしょう。もちろんそう見えない人にはそこまでしなくても良いという意味ではありませんが、アブラハムは礼を失することがないように、ケチらず、上等のものを進んで差し出しました。6 節に 3 セアの上等の小麦とありますが、欄外に 1 セアは 7.6 リットルとあることを考慮すると十分過ぎるほどの量だったことが分かります。また彼は 7 節で自ら柔らかくて、おいしそうな子牛を選んで調理させました。そして 8 節では彼自身、三人のために立って給仕しました。もう一つ思うことは、彼がとっさにこのようにできたのは普段からこのようにしていたことの現れだっただろうということです。この気持ち良い昼間の時間を喜んでささげたのはアブラハム一人ではありません。妻サラも、また若い者も、貴重な休みの時間を返上してこの奉仕に当たりました。もし滅多にもてなしをしない家だったら、きっと家族からブーブー不満が出て、このように迅速には動けなかったに違いありません。いかにこの家全体が普段からこのような旅人のもてなしに慣れていたかということをこれは物語っているように思います。

それにしてもなぜアブラハムはここまでのことをしたのでしょうか。旅人をもてなしても見返りはほとんど期待できません。彼がどういう思いでこのことをしたのかは5節の「せっかく、しもべのところをお通りになるのですから」という言葉に読み取ることができるかもしれません。アブラハムがここで考えているのは、これは神の摂理的な導きによるということです。あなたと私がこうして会うのは偶然ではない。つまりアブラハムはこの日の暑いころ、三人の旅人を目の前に認めた時、それは私が担当すべき人たちとして神が送られた人たちなのだと捉えたのです。ですから私たちも誰か困っている人、助けを必要としている人が自分の前に現れたら、その人は神が私のところへと送られた人なのだと考えてみなければなりません。マタイの福音書 25章35～40節でイエス様はこう言われました。「あなたがたはわたしが空腹であったときに食べ物を与え、渇いていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、わたしが裸のときに服を着せ、病気をしたときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからです。・・・まことに、あなたがたに言います。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。」　主はそのような形で今日も私たちのところに来られるということがあるのではないでしょうか。私たちはアブラハムのように、その人々を迎え入れ、助けの手を差し伸べることによって主ご自身をお迎えすることになるのです。そして主はここでアブラハムに親しくご自身を分かち合ってくださったように、私たちにもご自身を示し、大切な御心を私たちに分かち合ってくださるということが起こるのです。

さて9節以降で主は一つ目の大切なことを分かち合われます。三人はまずアブラハムに「あなたの妻サラはどこにいますか」と尋ねます。妻の話などしていないのに、その名前まで言い当てるところに、アブラハムは三人が普通の人ではないことを感じ取り始めたことでしょう。彼は答えます。「天幕の中におります。」　するとその内の一人が言いました。10節：「わたしは来年の今ごろ、必ずあなたのところに戻って来ます。そのとき、あなたの妻サラには男の子が生まれています。」　サラは、その人のうしろの天幕の入り口で聞いていました。そのサラはどんな反応を示したでしょうか。12節に彼女は心の中で笑ったとあります。これはどんな笑いでしょう。嬉しくて笑ったわけではありません。そんなバカな！という失笑にも似た笑いでしょう。思い起こされるのは前の17章17節のアブラハムの笑いです。彼は主の言葉を聞いてひれ伏して笑い、心の中でこう言いました。「百歳の者に子が生まれるだろうか。サラにして

も、九十歳の女が子を産めるだろうか。」　それとほとんど同じ笑いがここにあります。アブラハムはサラにこのことを伝えていなかったのでしょうか。それともサラは聞いても信じなかったのでしょうか。彼女はこの言葉に接して笑い、心の中でこう言ったと 12 節にあります。「年老いてしまったこの私に、何の楽しみがあるでしょう。それに主人も年寄りで。」

すると主はアブラハムに言われました。13 節 :「主はアブラハムに言われた。『なぜサラは笑って、[私は本当に子を産めるだろうか。こんなに年をとっているのに] と言うのか』」。サラはこれを聞いてドキッとしたに違いありません。自分が陰で聞いていることなど旅人には知られていないと思っていました。しかも笑ったのは心の中です。声を上げたわけではありません。誰も私の心を読めるはずはない。なのにこの方は、なぜサラは笑うのか！と指摘された。それを聞いて彼女は心臓が止まりそうな思いになったのではないでしょうか。

そして主は「主にとって不可能なことがあるだろうか」と続けられました。これこそ問題の核心です。サラは不可能だと思い、笑いました。11 節に「アブラハムとサラは年を重ねて老人になっていて、サラには女の月のものがもう止まっていた。」とありました。「女の月のもの」という部分には印がついていて、欄外に直訳で「女の道」とあります。彼女の胎はいわばもう死んでいました。それはしぼんでいました。人間の考えや経験上ではあり得ないこと、起こり得ないことです。しかし主は「主にとって不可能なことがあるだろうか」と問います。答えは不可能なことはないということですね。人間には考えられないから、主にもそれはできないと言ってはならない。主の力を私たちの頭で考えられる範囲に限定してはならない。主が約束されたことなら、それは必ずなる。それをサラが信じないでいたことが問題でした。主は 14 節後半で改めて「わたしは来年の今ごろ、定めた時に、あなたのところに戻って来る。そのとき、サラには男の子が生まれている。」と確言されました。

これを聞いたサラはどうしたでしょう。15 節にサラは打ち消して「私は笑っていません」と言ったとあります。確かに彼女は外側に現れる仕方では笑っていませんでした。しかし心の中では笑いました。ですから「私は笑っていません」という言葉はウソです。彼女は心の中まで見抜かれて、慌てて、恐ろしくなって、このように打ち消しました。これに対して主は何と言われたでしょうか。15 節後半 :「しかし、主は言

われた。『いや、確かにあなたは笑った。』」　今日見ているエピソードはこの言葉で締め括られています。つまりこの主の言葉こそ決定的なものであるということです。最後の審判はこのようなものであることを私たちは思って見るべきです。私たちのしたことが一つ一つ取り上げられます。私たちはそれらに対して、いいえ、私はそのようにはしていませんと弁解するかもしれません。色々理屈を並べて言い逃れしようとするかもしれません。しかし主はそれには動かされないのです。それらを全部聞いた後、「いや、あなたは確かにそれをした」とズバッと言われるのです。それに対して私たちはもう否定できないのです。

どうしたら良いでしょうか。箴言 28 章 13 節:「自分の背きを隠す者は成功しない。告白して捨てる者はあわれみを受ける。」　サラは自分の不信仰の罪を隠そうとしましたが、それは無駄でした。サラは主の約束を信じない不信仰の罪に加え、その不信仰の罪を隠そうとするという二重の罪を犯しました。そうではなく、もし罪を犯した自分があるなら、その自分を隠さずに認めることです。そうするところに実は祝福への道が開かれて行きます。主がここである意味で厳しくサラの不信仰を指摘されたのも、この悔い改めの祝福へと招くためだったと言えます。もしサラが自分の不信仰を認めず、それを隠したまま生きるなら、その後の人生も不信仰のままになります。しかしもし不信仰であった自分を認めるなら、彼女の前には真に主に信頼する新しい歩みが開かれることになります。神はそこへサラを導こうとされたのです。不可能なことは何もないご自身を信じて歩むように！と。そしてそのように主を信じる生き方へと立ち返ったサラに、いよいよ約束の子イサクが与えられることとなるのです。

私たちも神の力よりこの世の自然法則や人間世界の常識、あるいは人間の経験を上に置いていることはないでしょうか。私たちに考えにくいことは神にもできないと考え、神を小さな枠に閉じ込め、自らは信仰者であるとしつつも、日々失望とあきらめの中で生活していることはないでしょうか。聖書の様々な御言葉に接しても、サラと同じように不信仰によって笑って退けていることはないでしょうか。もちろん私たちは神にできないことは何もないと言って自分勝手な願望を神に押し付けてはなりません。神の御心が示されている聖書に目を向けないで、神には何ができるだろうかと空想することは愚かなことです。ここでサラが問題にされたのは神の約束に対する信仰です。そういう意味で私たちは神の約束が記されている聖書に聞くことが基本です。そしてそこで言われていることは必ずなると信じることが求められています。しかし

私たちは聖書にある多くの神の約束に触れつつも、それを本当に信じて生活しているのでしょうか。その約束に立ち、自分をそこに寄りかからせて生活しているのでしょうか。色々な理屈を並べて、それらは自分には起こり得ないことと切り捨てていることはないでしょうか。そしてさらに悪いことは、そのような不信仰の状態が自分にあるのに、それを隠したまま生きようとしていることはないでしょうか。しかし主はすべてをご存知です。「いや、確かにあなたは笑った」という主の言葉は、自分が不信仰の状態にあることを認めて、悔い改め、主の約束を信じる信仰の歩みへもう一度新しく立ち上がるようにと招くための言葉です。もし私たちも主の約束を本当に信じて歩んでいるのではない自分があることを思うなら、それを隠したまま生きるのではなく、それを認めて、もう一度主に信頼する信仰の歩みへ立ち上がらせていただく者でありたいと思います。そして主にとって不可能なことがあるだろうかと言われる主に信頼して、主がみことばにおいて約束くださっている祝福に豊かにあずからせていただく信仰の民、主の民の歩みへと導かれて行きたく思います。